

序

この報告書は、平成4年度に発掘調査を行った、ヲシガ浦南古墳の記録であります。

調査した古墳の近辺には、粕屋町により発掘調査された古大間池遺跡の住居跡群や、福岡県によって調査された九州縦貫自動車道にかかる古墳群及び須恵町により調査されたヲシガ浦古墳などがあります。

調査は、太陽ボデー株式会社の委託を受け、須恵町教育委員会が、福岡県教育委員会の協力を得て実施しました。

開発と文化財保護という現実の中で、多くの方々にご理解を頂き、私達の先人の文化遺産である古墳の発掘調査を無事終えることができました。

また、この報告書は、当地にあった古墳の貴重な記録として、後世に伝えることができると思います。

文末になってしまいましたが、報告書刊行までの間、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂いた、太陽ボデー株式会社の皆様、現場作業に従事された作業員の皆様方、及び地元の方々に深く感謝の意を表します。

平成5年3月31日

須恵町教育委員会
教育長 稲 永 忠

例 言

- 1 本書は、太陽ボデー株式会社による工場建設に伴う事前調査として実施された緊急発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、須恵町教育委員会が太陽ボデー株式会社の委託を受け、福岡県教育委員会の協力を得て実施したものである。
- 3 遺構の実測は、中間研志・吉留徹が、遺物の実測は平田春美・秦憲二・杉原敏之・中間が、製図は原カヨ子・豊福弥生が各々担当した。鉄器処理を九州歴史資料館横田義章氏にお願いした。遺構写真は中間が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。
- 4 本書の執筆・編集は中間が担当した。

本 文 目 次

	頁
I 調査の経過.....	1
II 位置と環境.....	1
III 墳 丘	4
IV 主 体 部.....	6
V 出 土 遺 物.....	11
VI ま と め	16

I 調査の経過

ヲシガ浦南古墳の発掘調査は、太陽ボデー株式会社の工場建設計画に伴う事前調査である。

平成4年冬に、須恵町教育委員会に、開発予定地における埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。そこで、町教委と福岡県教育庁福岡教育事務所文化財担当職員により現地踏査がなされた。尾根周辺を中心に現地確認を行ったが、前夏の台風による倒木が激しくて、古墳の有無等について判断は困難な状況であった。その後、町担当職員の記憶をたよりに、再度現地踏査した結果、尾根線上に古墳1基を確認することができた。

この結果をもとに、古墳の保存について会社側と協議したが、計画地内への進入路に位置するため、止むなく事前の発掘調査を実施することとなった。

太陽ボデー株式会社からの調査委託を受け、須恵町教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施した。現地調査では、福岡県教育庁福岡教育事務所から担当職員の派遣を受けた。

平成4年10月1日から10月28日までの現地調査期間の後、出土遺物整理、調査報告書刊行への作業を平成5年3月末日まで実施した。

10月の気候の良い時であったとはいえ、山道の登り降りや、重たい道具の運び上げ、肌寒い雨の中で、頑張って下さった地元の作業員の方々に心から感謝申し上げたい。また、測量に協力いただいた日高正幸氏（現小石原村教育委員会）や、指導・援助を受けた県文化財保護指導委員平ノ内幸治氏、篠栗町教育委員会吉留徹氏、作業員の募集等に尽力いただいた稲永俊一氏には心から御礼申し上げたい。

最後に、無理難題の協議に際して、深いご理解を示され、協力を惜しまれなかった太陽ボデー株式会社 代表取締役 社長小西重男氏に、深い謝意を表します。

なお、調査の組織は次のとおりである。

総括・庶務

須恵町教育委員会	教育長	瀧末友三郎(前任)	須恵町教育委員会	課長補佐	高山慶太郎
"	"	稲永 忠	"	須恵町立歴史民俗資料館	稲永 好
"	教育次長	武井 宏之	"	"	小山田恵美子
"	社会教育課長	中嶋 裕史	調査		
"	課長補佐	世利 孝志	福岡県教育庁福岡教育事務所技術主査	中間 研志	

II 位置と環境

ヲシガ浦南古墳は、福岡県糟屋郡須恵町大字植木字ヲシガ浦1448,1449番地他に所在し、すぐ北側は粕屋町との町境となる。



- 1. ラシガ浦南古墳 2. ラシガ浦古墳 3. 乙植木古墳群 4. 才木古墳
- 5. 大塚古墳群 6. 尾黒南古墳群 7. 柳坂古墳群 8. 尾黒古墳群
- 9. 牛ガ熊遺跡 (古墳時代集落跡)

Fig.1 周辺古墳群分布図 (1/10,000)



Fig. 2 ランガ浦南古墳周辺地形図 (1/2,500)

西北西の若杉山塊から、岳城を経て、西方の平野部へ舌状にのびる丘陵が派生している。当古墳はそれらのうちの、狭い尾根をもつ、谷の奥の方の小丘陵上に位置する。どちらかといえば、見晴らしは良いが、やや奥まったマイナーな占地である。

周辺の谷水田面から約20mの比高差があり、東側斜面は崖状の急斜面となり、登ってくるとすれば、南方からの尾根づたい、或は、西方の緩やかな谷方向からとなろう。

北方250mには、昭和56年8月に調査されたヲシガ浦古墳（註1）がかつて在り、同一古墳群と考えられる。ただ、この2基以外には、今回も尾根上面を中心として試掘調査を実施したが、他に古墳を発見することはできず、後期群集墳の一般的在り方とは様相が異なる。

周辺の古墳群については、開発に対してなすすべもなく調査を余儀なくされた古墳が多く、その結果、意外と古相を示すものが多いことがわかっている。6世紀前葉初築で6C後葉に改築され7世紀初頭まで追葬が行われたヲシガ浦古墳や、TK208型式の須恵器をもつ才木古墳（註2）、竪穴系横口式石室とその流れをくむ乙植木古墳群（註3）や、6世紀後半代の横穴式石室であるヨムギ古墳（註4）などがある。

これらの古墳群については、5世紀中～6世紀後半代に至るまで、主体部構造の変遷等について一目瞭然となっているが、それらの根拠地である集落については明らかでない。近年、本古墳から500m南方の低丘陵で発見された牛ガ熊遺跡は、この集落構造の判る貴重な遺跡である。4世紀末前後の小集落と、6世紀末前後の多くの倉庫群を伴う大集落が調査され、滑石製品生産集落としての位置付けも考えられている。ただ、これらの時期に符合する古墳群が至近範囲には見当らず、今後課題を残している。夥しい開発の波に対して、丘陵上だけでなく、周辺の平地における集落遺跡についても事前調査対象を拡げなければならないだろう。

註1 井上裕弘他「ヲシガ浦古墳」須恵町文化財調査報告書 第1集 須恵町教育委員会 1982

2 池辺元明他「才木古墳」須恵町文化財調査報告書 第4集 須恵町教育委員会 1990

3 石山勲他「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X」福岡県教育委員会 1977
飛野博文「乙植木古墳群Ⅱ」須恵町文化財調査報告書 第2集 須恵町教育委員会 1986

4 池辺元明他「ヨムギ古墳」須恵町文化財調査報告書 第3集 須恵町教育委員会 1989

Ⅲ 墳 丘

ヲシガ浦南古墳は、標高52m前後の尾根線上の先端部近くに築造された円墳である。尾根上面が幅30mほどに広がっている部分の中央に位置する。なお、この尾根の基盤は、部分的には滑石に近い片岩系の軟質岩盤である。

周溝（Fig. 4）現状では小墳丘の他は周溝も認められなかった。表土除去後、黒色土の帯状部分



Fig. 3 ランガ浦南古墳墳丘測量図 (1/300)

が2/3周ほど巡っていた。掘り下げた結果、深い所でも約10cmで、軟質岩盤を掘り込んだ状態であった。周溝の底だけがかろうじて残存していた状況と判断した。現状の周溝内側で直径16mとなり、墳丘規模を推定できるが、周溝が本来もっと深かったことを考えると、墳丘径は14m前後であったとした方がよい。周溝内からは、北西側のみから須恵器片が出土しており (Fig. 8)、それも見事に破碎された事がわかる細片のみの出土であった。

地山整形 (Fig. 4) 調査の結果、直径8mの中央部分が削り出されて、地山が小丘状に残された状況であった。つまり、現況のような平坦面の上に古墳が築造されたのではなく、全体がもっと高くなだらかな自然地形を、周縁を削り出すことによって、古墳の基盤部分を設けたと考えられる。約80~100cmの高さに削り出しており、その下端はしっかりした角をなしている。

盛土 (Fig. 5) 墳丘盛土の残存は良くない。奥壁側で40cm弱、南側壁側で20cm程、北側壁側では10cmしか残っていない。主体部石室の腰石部掘り込みをした後、腰石の裏を固めるように第3~

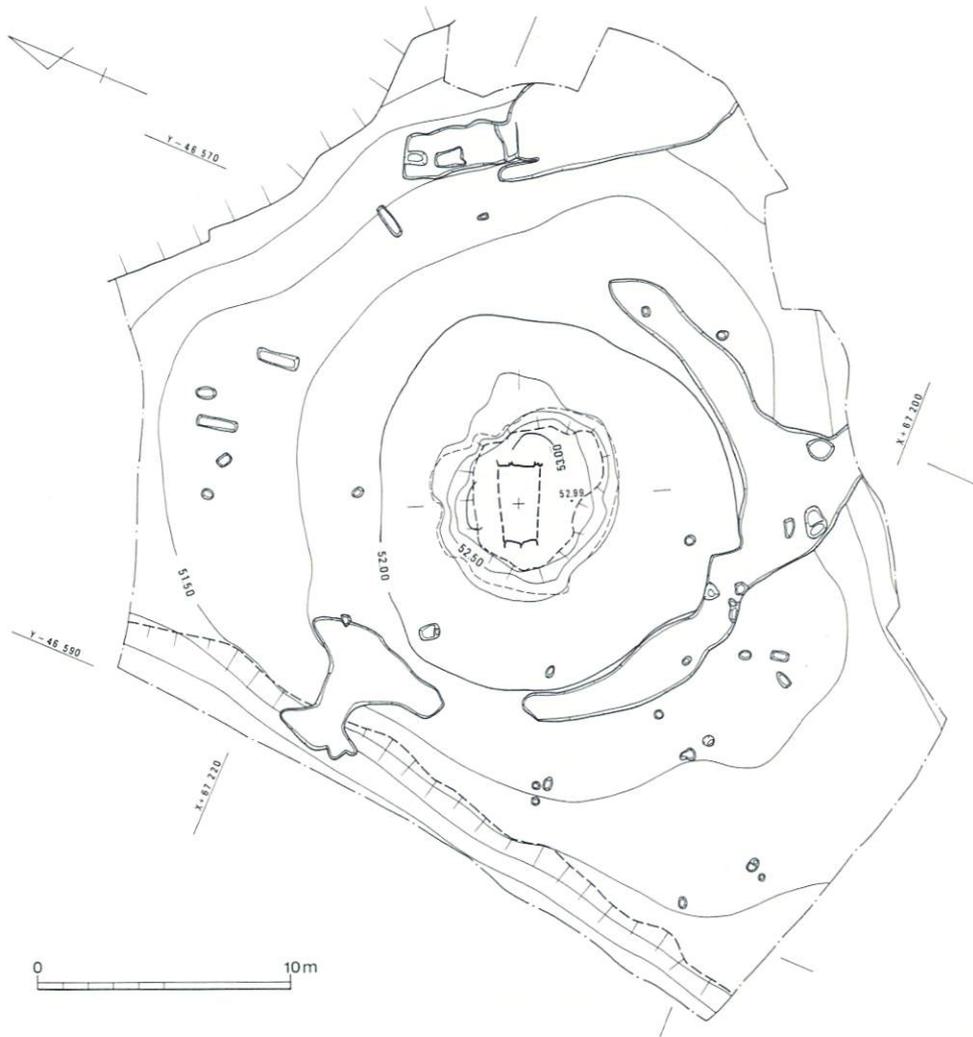


Fig. 4 ランガ浦南古墳発掘後(地山面)測量図 (1/300)

5層の盛土が施されている。それより上の盛土状況は判らない。下の第5層は旧表土と思われるが、奥壁側以外には認められない。第2層は外方へかなり広がっているが、盛土そのものではなく、表土が流れたものである。腰石寄りではかなり丁寧な細かい単位の作業が認められ、黒褐色土と黄茶褐色土の互層が施されている。

Ⅳ 主 体 部

ランガ浦南古墳は、羽子板状玄室プランを有する、単室横穴式石室である。ただ、両側壁は腰石のすべて、奥壁も腰石以上は全く無く、全体の正確な規模・プランは明確でない。

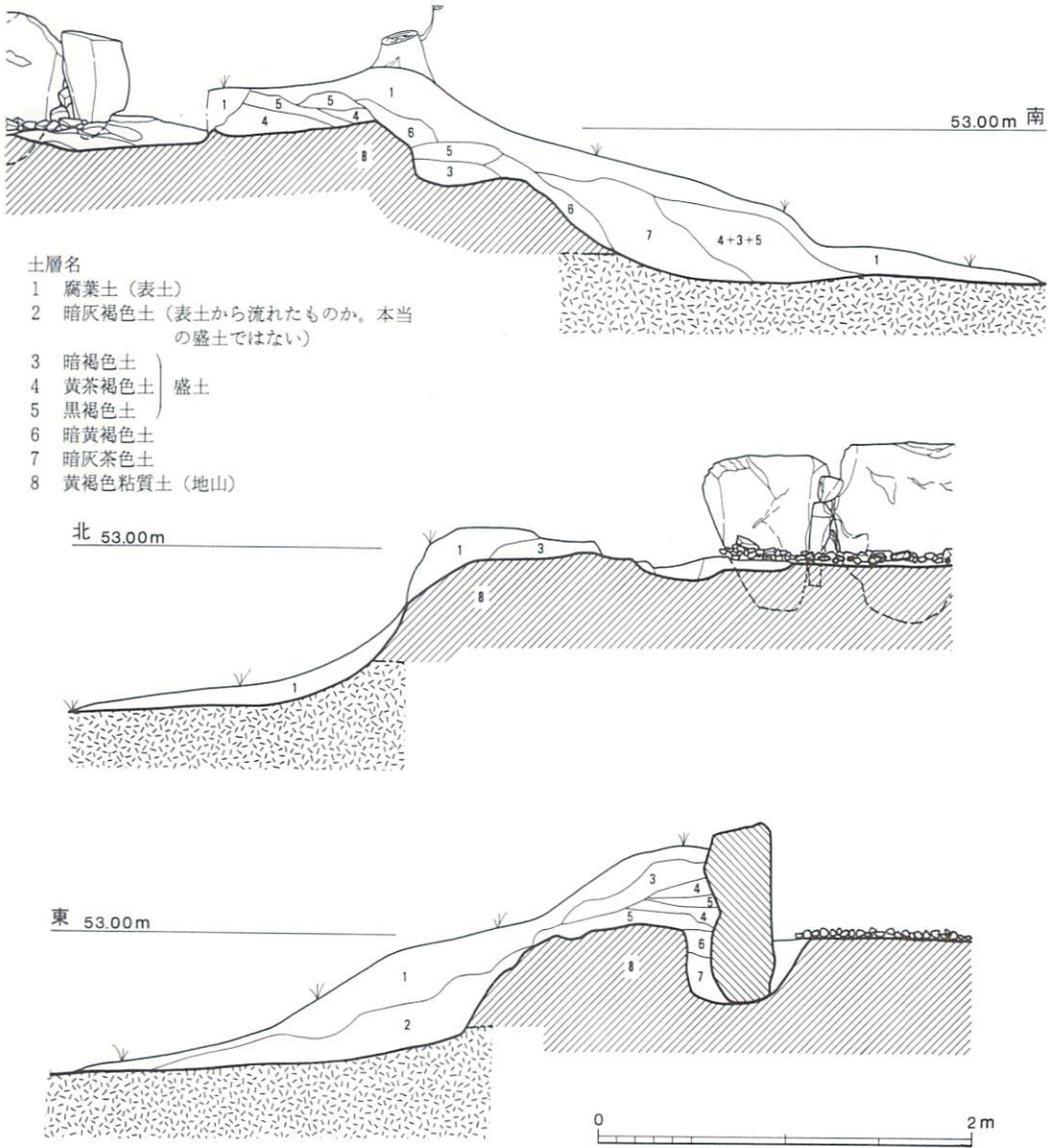
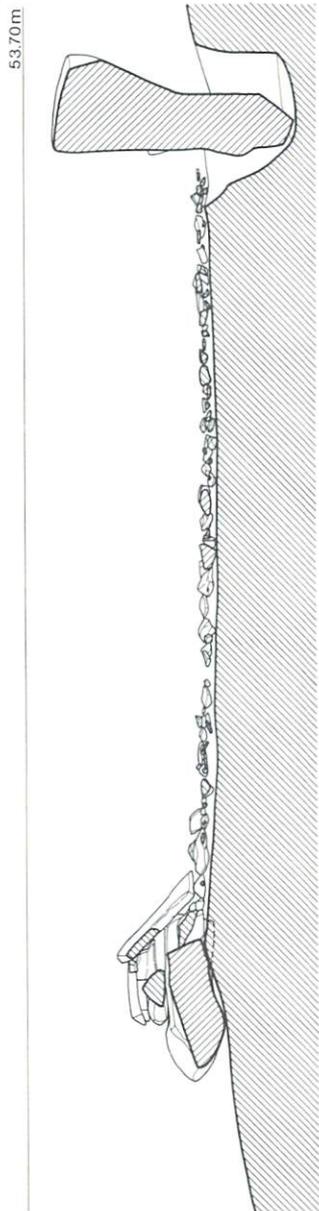
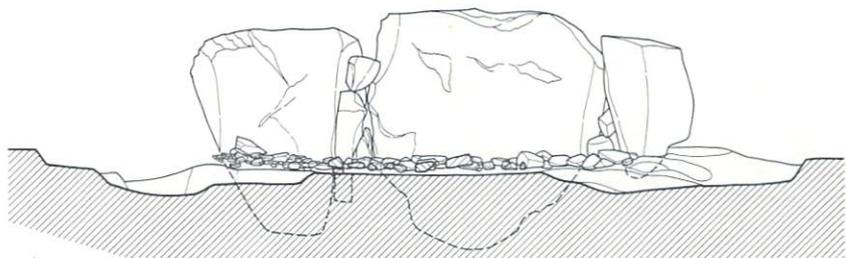


Fig. 5 ヨンガ浦南古墳墳丘断面実測図 (1/40)

構築法 石室を構築するために掘り込んだ所謂墓壇の確認を試みたが、殆どそれらしき輪郭をつかむことはできなかった。それもそのはずで、奥壁裏側の土層 (Fig. 5) をみると、石室床面の高さと、旧地表下の地山面とがほぼ同じレベルで、石室全体を収めるための墓壇掘り下げを殆どしていない事が判明した。玄室床面が平らになるように削った後に、奥壁と両側壁腰石部の掘り込みを行い、腰石を据えている。奥壁は大小2個の大石を、上端が揃うように立てており、地山への掘り込みも40cm弱と深い。両側壁も、腰石抜き跡の検出状況からみて、奥壁腰石ほどではな

53.70m



53.70m

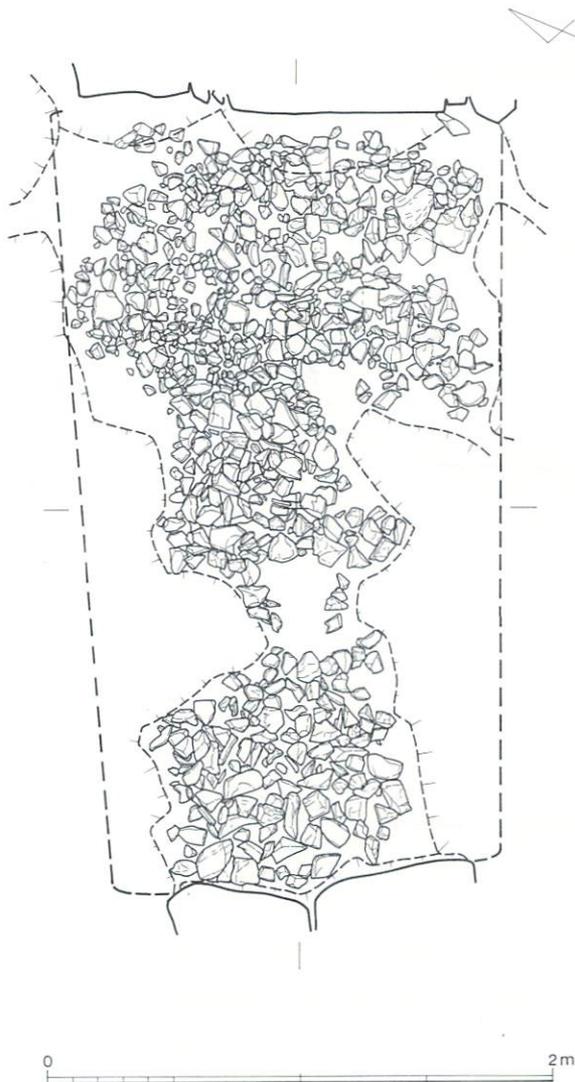


Fig. 6 石室実測図（その1）（1/30）

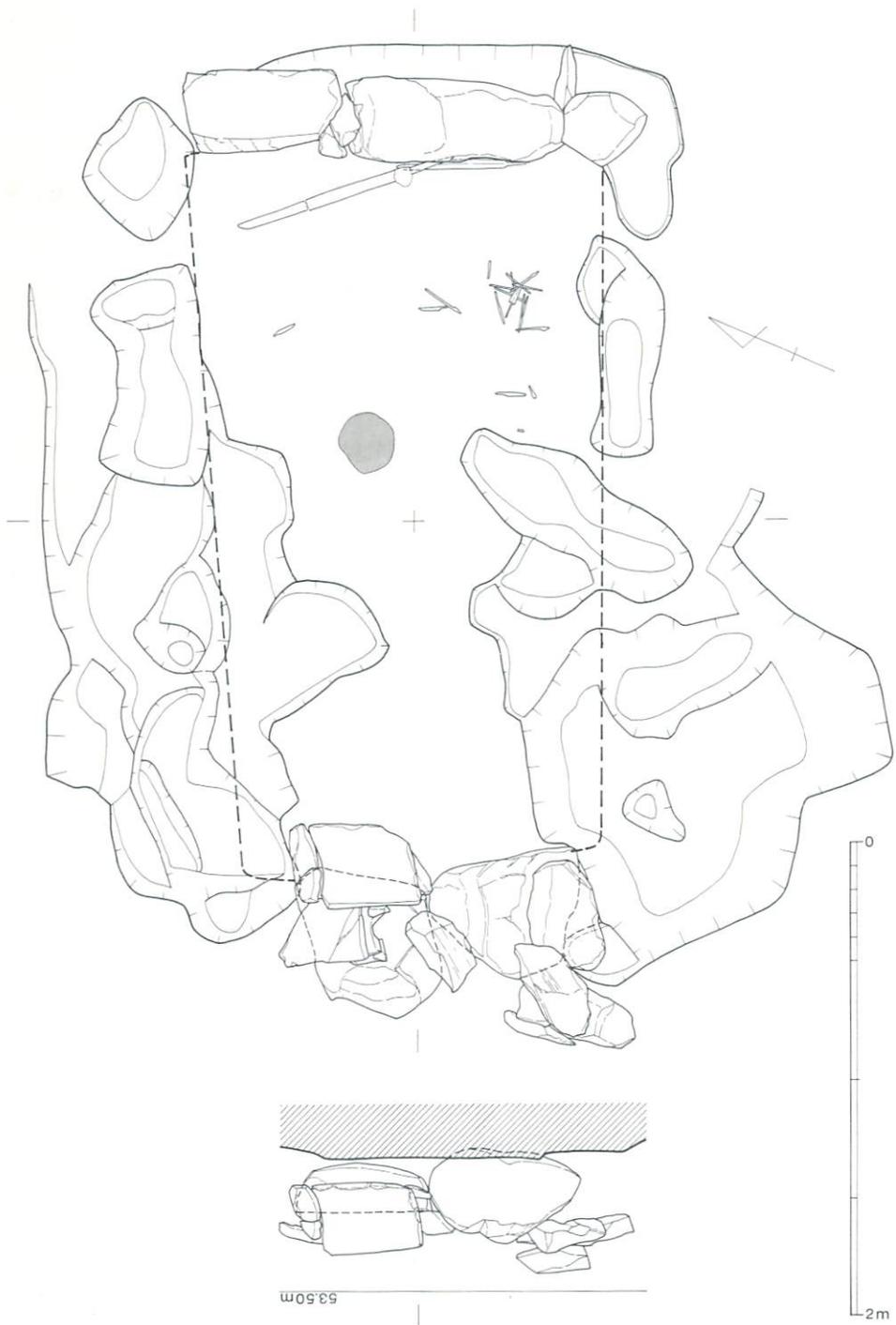


Fig.7 石室実測図(その2)(1/30)

くとも、わりと大きめの石を立てていたと推定できる。腰石より上の積石の状況は全く判らないが、当地の基盤の石材が片岩系であることや、玄門部閉塞の状況などからみて、板石を小口積していた可能性が強い。

玄室 南側からの大きな盗掘壕をはじめ、腰石の抜き取り等によって、旧状を留めない状況であったが、床面の敷石がかなり残っており、平面形を復原することができる。玄室床面幅は奥壁際で1.75m、玄門際で1.45m、長さは中軸線上で3.05mとなり、奥壁側の幅の広い羽子板状プランのタイプと復原できる。(Fig. 6・7の点線部分) 閉塞部の両側にコーナーを書いてみたが、両側壁ともにわずかに胴張りとなって、直接閉塞の角にとりつく可能性も強い。床面には前面に敷石が敷き詰められている。10~15cm大の大きめの角礫の間に5cm大の小礫を詰めている。緑色片岩の河原石も多いが、ここの基盤の軟質片岩の破碎礫が殆どである。

閉塞 西南側の石積みは、発掘当初は石室壁が良好に残ったものと思っていたが、その内側に頁岩質の板石が立てかけられている状況から、閉塞部と判断した。地山上に2個の塊石を据え並べているが、他側壁腰石部のように掘り込んだ中に立てた状態と異なっている。これらは、閉塞そのもの、或は、竪穴系横口式石室の玄室から一段高くなった玄門部の段状積石に通じる類であろう。板石をその内側に立てかけているのも、その系統を意識したものであろう。

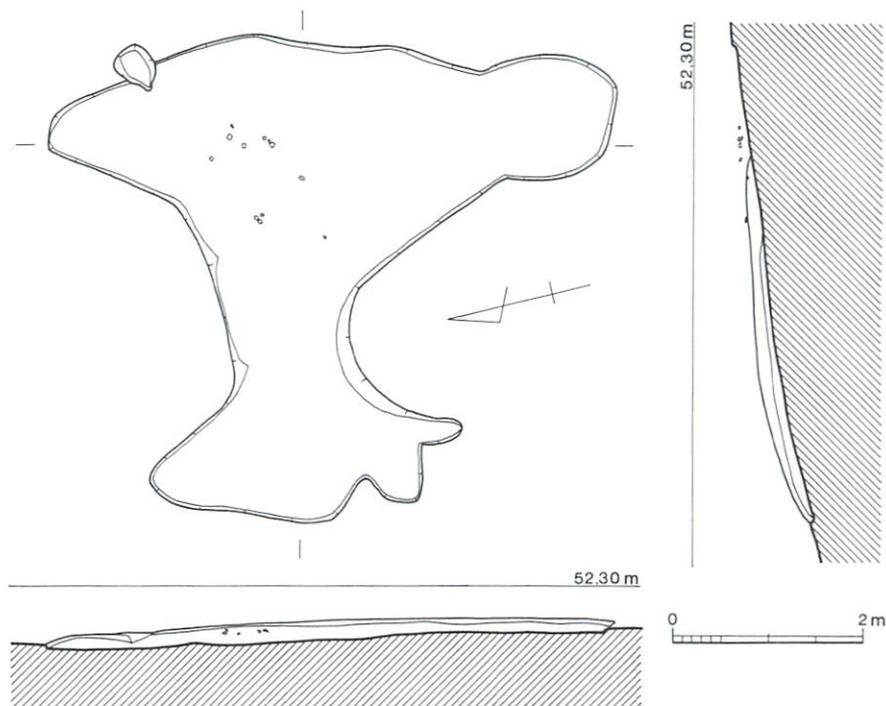


Fig. 8 西裾周溝内須恵器片出土状態実測図 (1/80)

羨道部など 羨道と墓道部分は全く残っていないが、地山への掘り込み痕もみられないことから、墳丘をある程度形成した後に構築されたと思われる。即ち、盛土を切って羨道部の壁積みをその中途から行っているため、痕跡が残らなかったと考えられる。ただ、小規模な羨道であったと推定される。

V 出土遺物

遺物出土状態 (Fig. 7・8)

大きく分けて、玄室内の副葬品と、盗掘墳内及び墳丘中の土器片、西裾周溝内の須恵器群と3つになる。

玄室床面の副葬品は、すべて中心より奥壁側から出土しており、鉄製武器のみである。剣は奥壁沿いに置かれ、太刀も若干動いてはいるが、本来奥壁際に在ったと思われる。太刀が剣の上ののっており、副葬時が違うとすれば、太刀が新しくなる。鉄鏃と刀子が右壁寄りに集中して発見された。一括で副葬されたものと思われるが、方向がかなりバラバラで、追葬時に攪乱を受けたと推定される。刀子のうち3本は各々鏃の群から離れた位置にあり、意識して別途置かれたものであろう。なお、床面中央付近の直径25cmの範囲が赤く染まっていた。ここが一般的な頭位と考えると、埋葬方向について理解に苦しむ。或は追葬時のものなのかもしれない。

鉄器 (Fig. 9~11)

剣 (Fig. 9-1) 全長56.1cm、刃渡り46.4cm、刃部最大幅3.3cm、厚さ0.8cmとなる。中央鑢は鋒先から茎側へゆくに従って不明瞭となる。関部は小さな角関から両削ぎ状となって茎へと続く。柄尻近くで茎が折れているが、そこに目釘穴が認められる。関部には鍔装着の痕跡と思われる横すじが5mm幅ほどの間にみられる。身部には各所に鞆の木質が付着している。

太刀 (Fig. 9-2) 全長95.3cm、刃渡り74.8cm、刃部最大身幅4.3cm、背厚さ0.9cmと大型で部厚い太刀である。全体に僅かに内反り気味となり、茎部でそれが顕著となっている。関部付近

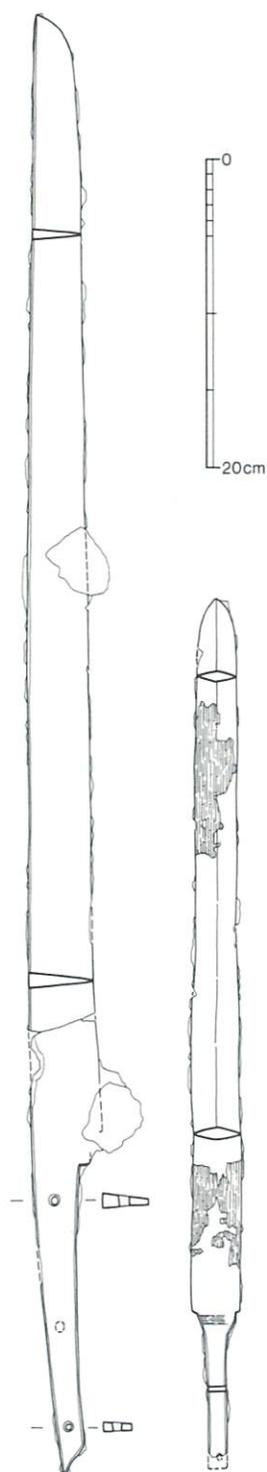


Fig. 9 太刀・剣実測図 (1/5)

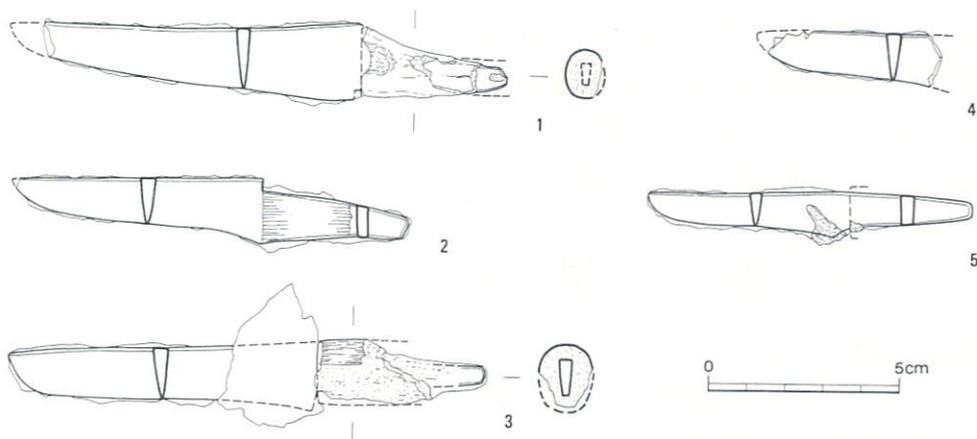


Fig.10 刀子実測図（1/2）

に丁度大きな錆の塊があり、関の形状が明確でない。現状観察から考えられることは、2段の角関の可能性が高いが、異類であり、慎重を要するところである。或は、角関の角部欠損なのか、更には、片削関になるのか判然としない。茎部には目釘穴が2ヶ所にみられるが、その中間にも、もう1ヶ所、目釘が詰まった状態かと思われる部位もある。茎尻は、一段細くなって尖るように延びる形状をなし、古式刀にみられる特徴と共通する。背部の一部に鞆の木質が残存している。刀子（Fig.10）5点出土したが、うち4のみが玄室盗掘壕内出土品で、他はすべて床面副葬品である。うち3点が鹿角装柄刀子であり、注目に値する。1は、鋒先が欠損しているが、復原全長約13cm、刃渡り9.3cmで、関部まで鹿角柄が装着されている。最大身幅2cm、背厚さ3mmとなる。鹿角柄は、表面がかなりの部分残存しており、従来復原していたように全体が同じ太さで筒状となるものではなく、鹿角の旧状を生かした柄の形態となっている。2は、全長10.5cm、刃渡り6.6cm、最大身幅は関部で1.8cm、背厚さ0.3cmとなる。背側が角関をなしており、茎は茎尻側が内反り気味となる。茎部には柄の木質が付着している。3は、全長12.5cm、刃渡り8cm、身幅1.5cm、背厚さ0.4cmとなる。関部付近は大きな錆の塊があり、形状は明確でない。柄には鹿角を用いている。4は、身部のみ残存したもので、現在長4.6cm、最大身幅1.4cm、背の厚さ0.35cmとなる。盗掘壕内出土品であるが、本来玄室床面に副葬されていたものであろう。5は、全長8.5cm、刃渡り4.9cm、最大身幅は関部で1.2cm、背厚さ0.3cmとなる。刃部側の片削ぎ関となり、関部から少し茎側から鹿角装柄が始まっている。身部にも一部鹿角片が付着しており、鞆も鹿角製であったと考えられる。小ぶりであるが、全装鹿角製の愛用品であったと思われる。

鉄鏃（Fig.11）図示したものが、小片も含めてすべてであるが、個体数は鋒先片の数が12点あるので、本来12本を若干超える程度の本数あったものと考えられる。大きく2種に分けられ、幅広の柳葉形に腸袂のついた形状の1と、それ以外の刀身形に小さな腸袂が刃部側についた細根タイ

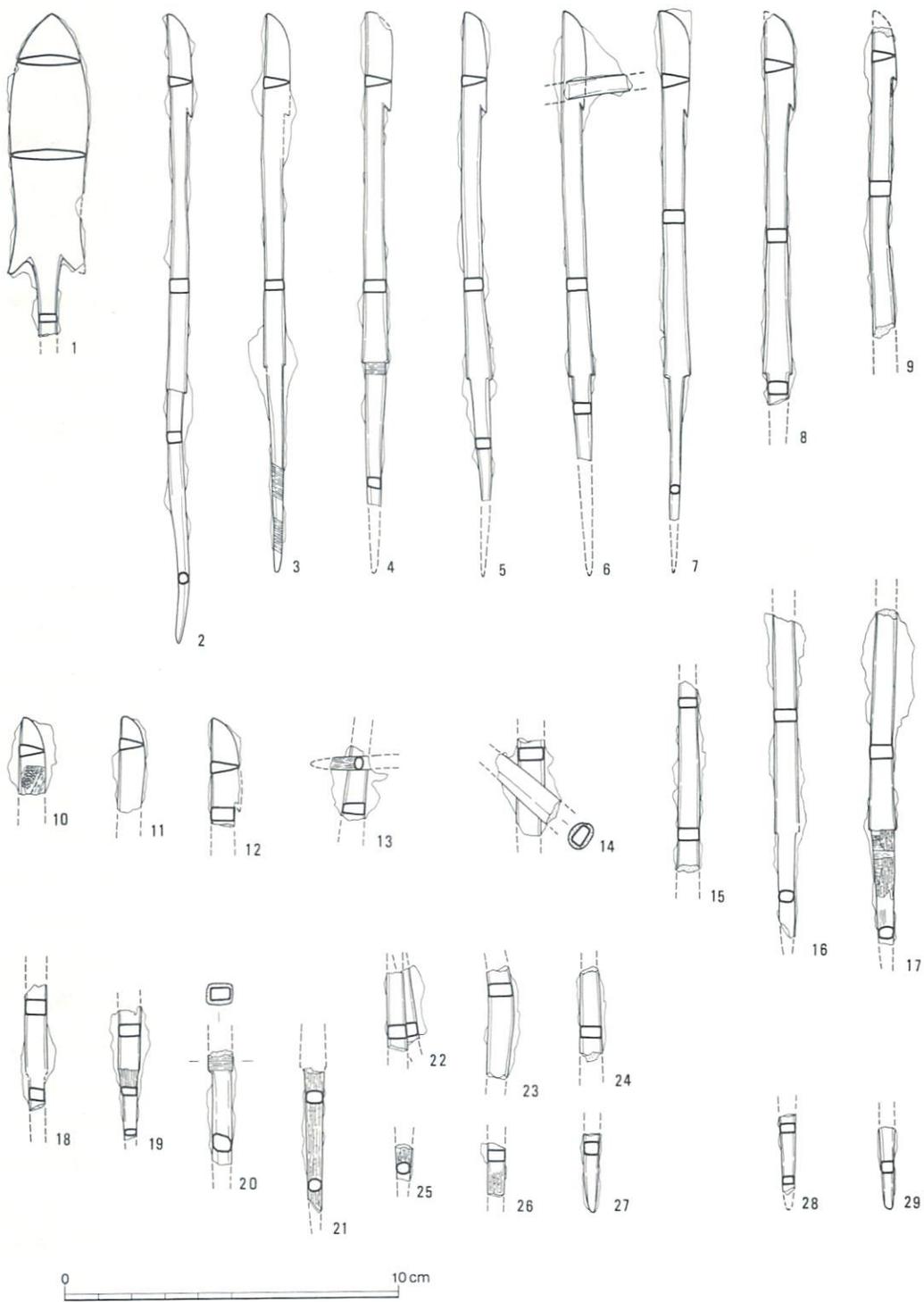


Fig.11 鉄鏃実測図 (1/2)

プとなる。1は、現存長9.4cm、最大幅2.4cm、厚さ0.3cmとなる。2は、全長18.3cm、刀身形の鋒部長3.1cm、幅0.7cm、厚さ0.25cm、茎部長7.5cmと長い。3は、やや短めの類であるが基本形は2と同種である。全長16.3cm、鋒部長3cm、幅0.8cm、背厚さ0.3cm、茎部長6.1cmとなる。茎部には、やや斜位方向の樺巻き痕が認められる。4～9も3とほぼ同類で、寸法も同様である。4の茎部にも樺巻き痕が残っている。6の鋒部近くには、別個体の鉄鏃の茎部分が直角方向に錆着している。9の刀身部基部の腸扶は明確でない。10は、布の付着が認められて、平織の粗目のもの（1cm間に経12～14本、緯10～11本）である。13は、直角方向に木質の付着した茎尻付近の別個体が錆着している。14は斜位に2個体が錆着しているが、上のものは茎部上半のもので、樺巻きが認められる。17は、茎部分の木質の上に樺巻きが施されている。27・28・29は茎尻部の小片であるが、ここで出土した細根鏃の殆どは、その最下端近くまで断面が方形・長方形に近い角ばった面をもっているのが特徴である。

出土土器（Fig.12）

杯蓋（1～7）1は、西側裾の周溝内出土須恵器で、復原口径12cmとなる。口唇部外端は鋭く突出し、内側に段をつくる。外面の体部との境も鋭くとがり、全体にシャープなつくりで、特徴的である。内外面ともに横ナデ、全面に灰をかぶって黄灰～灰白色をなす。胎土精良で、焼成堅緻である。2は、西側裾の周溝内出土須恵器で、復原口径14cmとなる。口縁はほぼ直立して高さ2.2cmと長く、作りは1と同様に極めてシャープである。内外面ともに横ナデ、全体に灰かぶりして、灰白～暗灰色をなす。胎土精良で焼成堅緻である。3は、玄室内埋土中出土品で、口縁端や体部の境目は鋭いつくりである。杯蓋ではなく、有蓋高杯の蓋と考えられる。小片であるが復原すると口径14cmほどとなり、内外面ともに横ナデを施している。胎土精良で、焼成堅緻、外面は灰黒色、内面は青灰色をなす。4は、墳丘盛土中出土の天井部片である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ、胎土精良で焼成堅緻である。外面は灰かぶりして灰褐色をなし、内面は暗青灰色となる。5は、西側周溝内出土品で、天井外面は左廻り方向の回転ヘラ削り、内面は回転ナデを施す。胎土に黒色粒・細石英粒を若干含み、焼成堅緻で、外面は暗青灰色、内面は青灰色をなす。6は、墳丘盛土中出土品で、天井部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデを施している。胎土精良で、焼成良好、内外面ともに小豆色をなす。7は、1・2と共通するシャープなつくりの類で、玄室南西側の攪乱土中出土品である。内外面ともに横ナデで、胎土精良、焼成堅緻で外面は灰色、内面は暗灰色をなす。

杯身（8）西裾周溝内出土須恵器片で、口縁を欠く。内面から体部外面上端までは横ナデ、底外面は回転ヘラ削りを施す。胎土に砂粒をわずかに含み、焼成堅緻で、外面は暗灰色、内面は青灰色をなす。

高杯（9）脚端部のみの小片である。西側周溝内出土品で、復原脚端径7.8cmとなる。内湾して尖

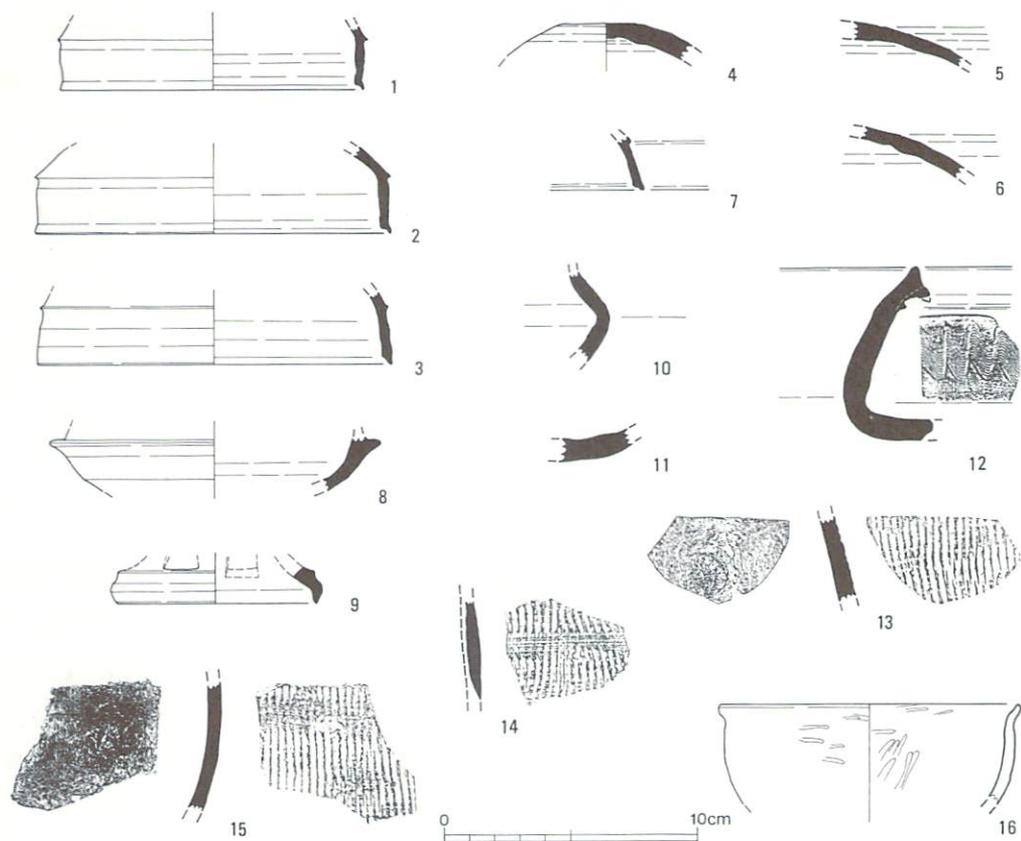


Fig.12 墳丘・周溝等出土土器実測図(1/3)

る形態で、透かし部の切り込みが認められる。内外面ともに回転ナデで、胎土精良で、焼成良好、内外面ともに淡青灰色をなす。

甕(10・11) いずれも西裾周溝内出土須恵器で、10は、胴部小片で、内外面横ナデを施す。小ぶりの器形となりそうで、頸部が太めの類である。胎土に粗石英粒をわずかに含み、焼成良好で、外面上半は灰をかぶっており、下半は黒色、内面は暗灰色をなす。11は、底部片で、やや平底っぽい丸底になるかと思われる。外面はナデ、内面は指オサエ痕が著しい。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で外面は淡青灰色、内面は灰色をなす。

壺(12~15) 12は、墳丘の盛土中出土品で、外方へ鋭く突出する口縁端とその直下に巡らす小さくシャープな三角凸帯が特徴的である。頸部外面上半には14本の歯をもつ櫛描波状文を施している。内外面ともに横ナデで、胎土精良で焼成堅緻、内面と胎は小豆色、外面は黒色をなす。頸部での屈曲が強く、胴上半で強く張る器形になると考えられる。13は、胴部片で、外面は条蓆状叩きを施す。内面は細身の青海波あて具痕をナデ消している。胎土精良で、焼成堅緻、内面は小豆色、外面は暗灰色をなす。西裾周溝内出土品である。14も西裾周溝内出土品で、内面は剥げてい

るが、外面は条席状叩きの上を横位カキ目風の擦過が施されている。胎土に細砂粒をわずかに含むが、焼成堅緻で、内面は小豆色、外面は黒灰色をなす。15は、西裾周溝内出土品で、外面は縦位の条席状叩きの上に横位カキ目風擦過痕が認められる。内面は細身の青海波あて具痕をナデ消している。胎土精良で、焼成堅緻、外面は灰かぶりしており、内面は小豆色をなす。

椀(16) 土師器で、玄室の盗掘壕内出土品で、復原口径12cmとなる。口縁が短く外反して、丸っこく内湾する体部となる器形となる。内外面ともにヘラ磨きを施している。胎土精良で、焼成良好、全面淡橙褐色をなす。

Ⅵ ま と め

ヲシガ浦南古墳の年代・性格等について各々とりまとめてみたい。

時期 Fig.12で示した土器類は、シャープな杯類、特徴的な高杯脚端部、格子目に近い縦方向の条線状叩きと内面ナデ消しの手法をみせる壺など、明らかに6世紀代以降に下がるものは見られない。このことは、追葬が長く続いたものではない事を示しており、ほぼ短期間に利用が終わったことがわかる。出土須恵器のうち、杯蓋は口径12cmのものと14cm前後のものに分けられる。ただ両者に細部のシャープさで差は無く、大阪府陶邑窯跡群編年のTK208型式に該当する。近隣の乙植木第6号墳出土のものよりもシャープさに富み、より古相を示す。甕や壺においては、焼成に陶質土器系統の趣きを残すことや、壺胴部外面のカキ目が部分的で、縄席文的趣きを残していることなど、古い様相が認められる。土師器椀についても、口縁が短く外傾し、未だ定型化した内湾口縁の類にはなっておらず、須恵器の時期と合致する。以上のことから、TK208型式を中心としながらも、若干古い様相をもつ、5世紀中頃に近い後葉段階が当古墳の築造時期と考えておきたい。

石室構造 ヲシガ浦南古墳は、幅1.75m、長さ3.05mの羽子板状プランをなす玄室を有するが、この形態は乙植木第1号墳のような狭長な堅穴系横口式石室と、乙植木第6号墳のやや幅広になったプランの玄室とに比べれば、より後者に近似している。形状や規模からみると、乙植木第2号墳に最も近いといえる。時期的にもヲシガ浦南古墳とこれらの古墳とは近い時期にあり、並立する隣のグループの関係にあるといえる。また、ヲシガ浦南古墳で明らかでなかった羨道部の状況も、乙植木第2号墳のように短く墓壇内部でおさまる程度のもの、或は第6号墳のようにハの字状に短く開き、盛土上に乗る形態であったことが類推される。墳丘についても、これらの乙植木古墳群の状況をみると、ヲシガ浦南古墳の周囲の地山整形は、後世の開墾により削除されて大きく変容していることが充分首肯できる。本来周溝際まで墳丘があったと考えてよからう。

被葬者 小規模な円墳であるが、丘陵尾根頂部を占めており、当該時期の古墳としては決して従たる位置付けのものではない。昭和56年調査の北隣のヲシガ浦古墳とは、広い意味で同一古墳群であり、西側の谷を共有する間柄である。ヲシガ浦古墳は調査時には独立墳としての位置付けが考えられていたが、今回の調査で、連続する尾根上に両者が位置することから、5世紀後葉→6世紀前葉（→追葬時の7世紀初）までの継続性が考えられるようになった。同一族による葬地と推定してよかろう。この一族は、南方の乙植木古墳群の一族が3号墳の6世紀初頭頃に鏡を2枚所有するに至るまで向上したのに対して、ヲシガ浦南古墳の時期ではほぼ同等の関係があったにも関わらず、それ以降の一族の伸長は目立たなかったものと考えられよう。以上のような観察から、ヲシガ浦南古墳の被葬者は、長大な太刀や武器の副葬状況などからみて、粕屋南半部を治めた地方権力の下で武力にたけた一人として数集落を従えた勇者一族であったと考えられる。

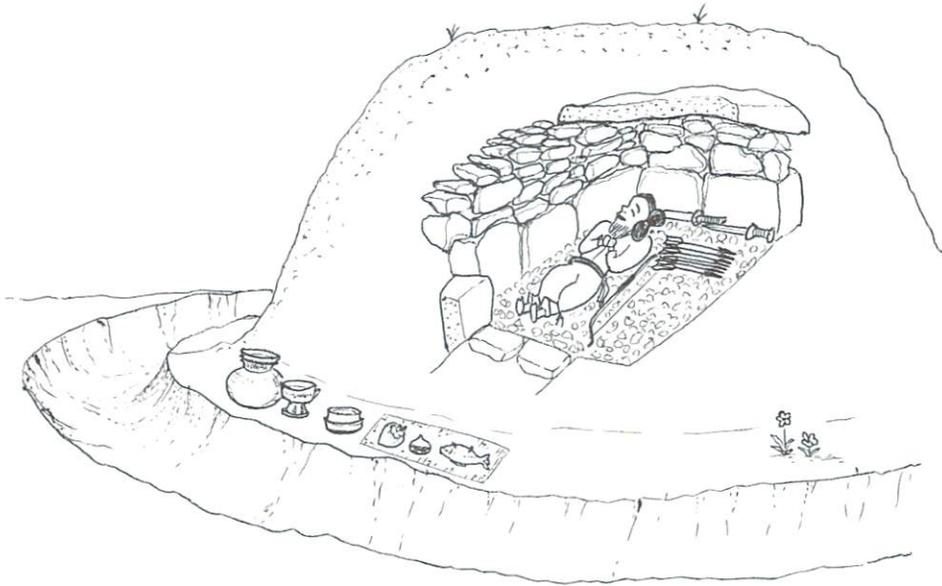


Fig.13 ヲシガ浦南古墳の葬送

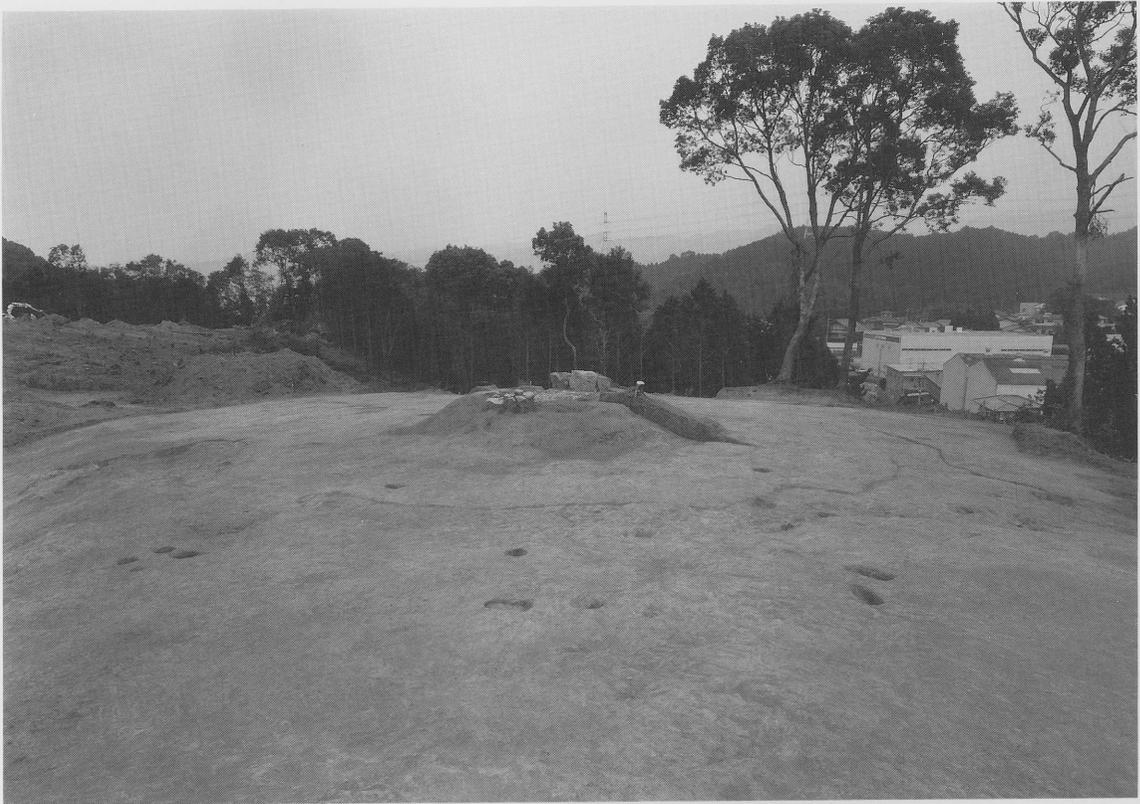
PLATES



(1) ヨシガ浦南古墳調査前全景（西から）



(2) ヨシガ浦南古墳調査前全景（北東から）



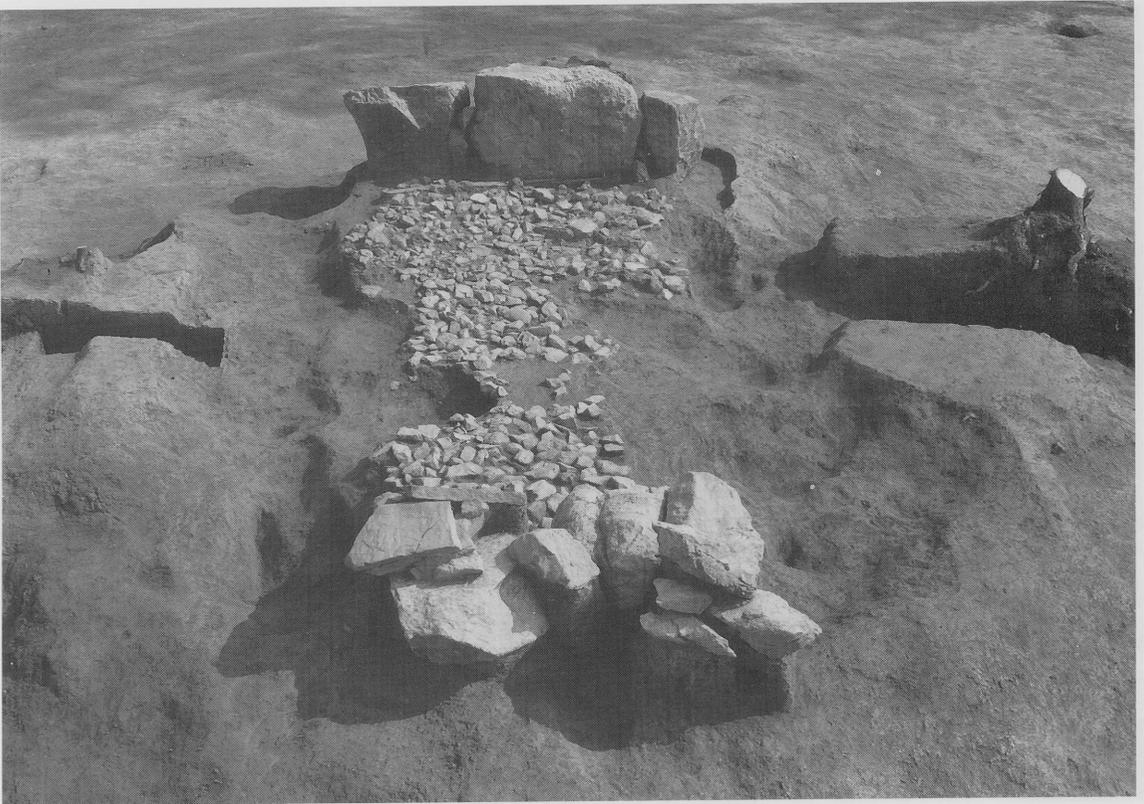
(1) 墳丘除去後全景（西から）

（中略）豊後国高田郡高田町 11



(2) 墳丘除去後全景（東から）

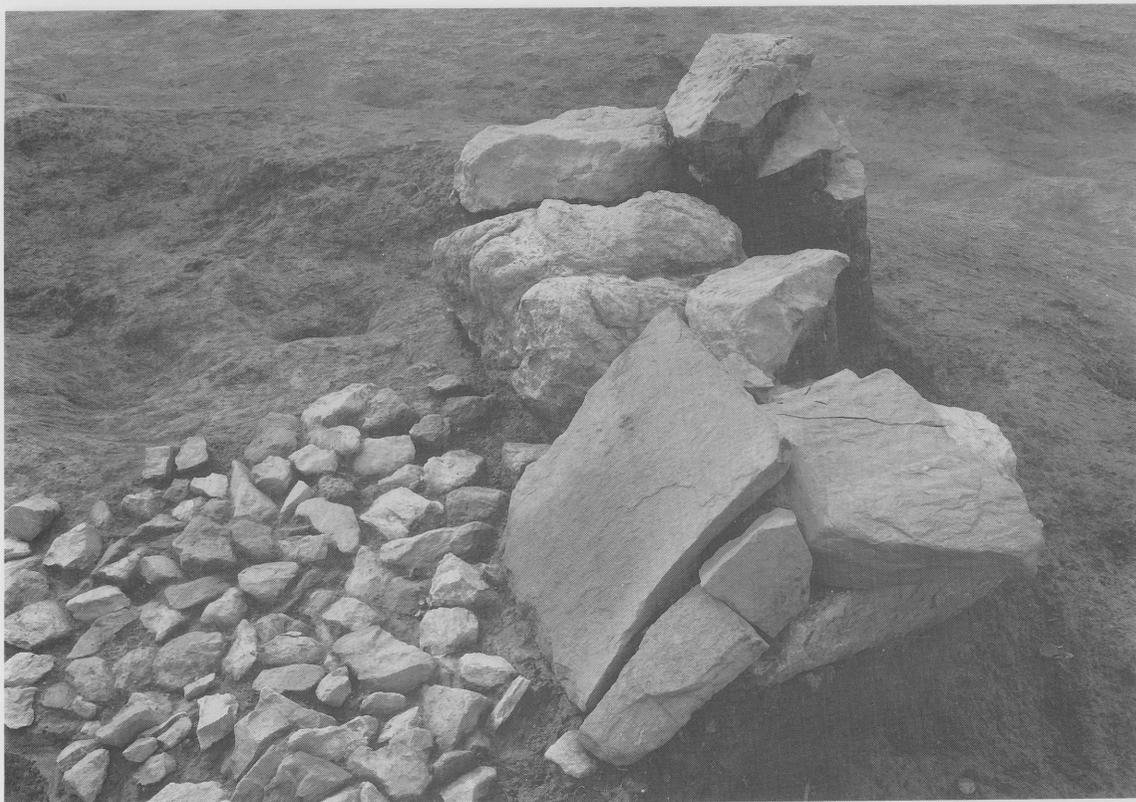
（中略）豊後国高田郡高田町 11



(1) 石室発掘後全景（西から）



(2) 奥壁際の鉄剣・鉄太刀・鉄鎌・鉄刀子出土状態



(1) 玄門部閉塞状況（北から）

【2017】 宮内省歴史資料館 17



(2) 玄門部腰石状閉塞（框石状）の状況（南東から）

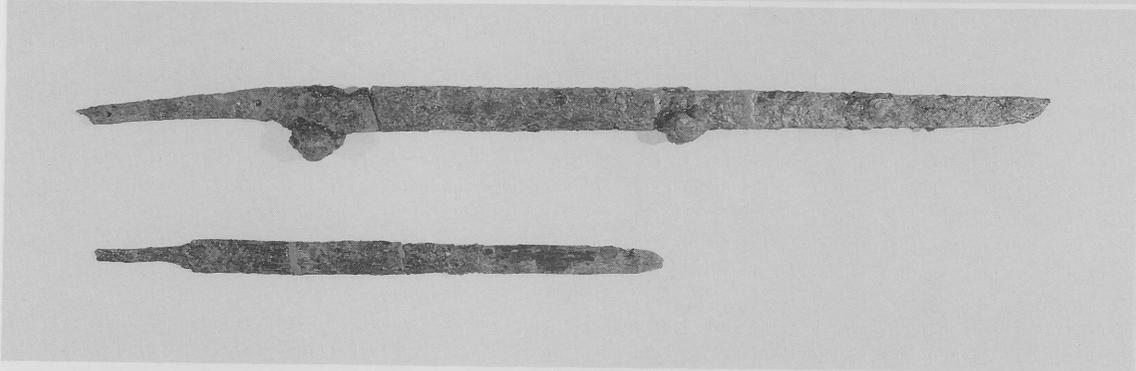
【2017】 宮内省歴史資料館 17



(1) 奥壁側墳丘断面（北から）



(2) 西裾周溝の土器片出土状態（北から）



ヲンガ浦南古墳出土鉄器

ヲシガ浦南古墳

須恵町文化財調査報告書 第5集

平成5年3月31日

発行 須恵町教育委員会
糟屋郡須恵町大字須恵771

印刷 日本商工株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31